

資料と公共性 : 2018年度研究成果年次報告書

岡崎, 敦

九州大学大学院人文科学研究院 | 九州大学大学院統合新領域学府 : 教授

市澤, 哲

神戸大学大学院人文科学研究科 : 教授

石田, 栄美

九州大学附属図書館 | 九州大学大学院統合新領域学府 : 准教授

後小路, 雅弘

九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

他

<https://doi.org/10.15017/2230688>

出版情報 : 2019-03-14. 九州大学大学院人文科学研究院

バージョン :

権利関係 :

「学校資料」の射程

岡崎 敦

研究会では、まず和崎光太郎氏より、京都市の初等教育学校に関して、学校史と学校資料について説明され、特に、学校歴史資料の多様性とその具体的管理、およびその利活用について熱く論じられた。その後、村野正景氏から、「学校資料と公共」と題して、学校資料の「価値」や学校博物館という存在自体を、近代日本の博物館史のなかで再考する報告が行われた。

ここでは、両氏の報告を受けて、「資料と公共性」という観点から、いくつか考えたところをコメントしたい。

第一に、学校なるものが、単に「公」教育が施される場としてだけではなく、さまざまな関係者が独自の観点、利害から関与する「公共空間」そのものであることがあらためて確認された。たとえば、京都市における草創期の初等学校は、文字通り江戸時代から続く「地域社会」そのものが担っていた。財政的支援を受ける一方で、初等学校が地域アイデンティティの核として機能していたことは、場所の選定、建築様式、雑多な収蔵資料などから明らかである。京都市の場合、特に興味深いのは、地域名望家もまた自らの子弟を地域の初等学校に通わせていたことである。

他方、本研究会が開かれた九州大学箱崎キャンパス内の旧工学部本館は、実は、帝国大学であったにも関わらず、建築資金は地元の財界が負担していた。帝国大学の誘致自体、地域社会の悲願による運動の結果であり、ここでは、「地域社会のなかでの学校」という論点が、かなり一般的なかたちでなりたちうることが示唆されている。

明治時代に開始された日本の近代的「公」教育制度は、それまでの私塾や寺子屋とは根本的に異なり、国家的に定められた法制度のもとで画一的な運営を想定していたが、個々の学校の具体的存立や機能という点では、地域社会の状況との関係で、かなり複雑で多様な相貌をみせていたことが推測される。

第二に、その必然的結果として、「学校資料」が示す多様性の大きさが特筆される。単に教育のための参考資料や学校運営資料のみならず、さまざまな理由により、みずから収集したものに加え、外部から持ち込まれたもの（寄贈も含む）が多数みられる。京都市の初等学校においては、卒業生でもある高名な日本画家が寄贈した絵画をはじめとする芸術作品が印象的であるが、さらに、学校関係者自身が、さまざまな理由から収集した資料もある。たとえば、黎明期の日本考古学の担い手が地域の学校教師であったことの反映か、考古資料を大量に収蔵する学校も珍しくない。

ここでも、九州大学の例を想起するなら、研究会会場の旧工学部本館には、著名な画家による壁画が保存されているほか、同じく歴代総長や教授たちの肖像画が学内に多数存在し、そのなかには芸術的価値が認められるものも少なくない。九州大学箱崎キャンパスの

現在解体中の建築の多くは、九州帝国大学所属の教員による設計になり、近代遺産としての価値も取りざたされていた。その他、大学には、研究者が収集した膨大な昆虫コレクション、歴史古文書、人体標本などが、それらを収集した研究者の退職後も保管され続けている。

学校という場合は、厳密にはその本来的活動とは無関係なさまざまな資料を引きつけてきた不思議な場所と言える。学校に寄贈すれば未来永劫適正な管理が保証されるという認識は、本来的にも、現実的にも幻想だが、このような幻想がなぜ成立し、共有されていたのかは、興味ある研究課題である。他方、「ある」学校に関する資料は、当該学校だけに保管されている訳では当然ない。ここからは、「ある」学校が管理してきた資料群とは一体何なのかという問題が生じる。言うまでもなく、これこそ有機的に形成されたかたまりの意味を問うアーカイブズの観点である。

第三に、日本近代の学校のもつ「先進性」である。明治以降の近代的学校制度は、西欧の最先端の技芸、流行の最初の受容、展開の場であり、学校には、高価な実験器具、オルガン楽器などが設置された。学校建築自体、地域の近代化のシンボルとして特別な様式で建てられたらしい。西欧前近代の教会に類した機能を果たしていたとも思える。

また、日本近代の学校は、「クラブ活動」を通じて、スポーツや文化の多様な領域で、最初の受容の場となった。たとえば、九州大学大学文書館には、九州大学フィルハーモニーオーケストラ(九大フィル)旧蔵の楽器や楽譜が保管されているが、九大フィルは、「第九」第4楽章の日本初演を担うなど、草創期のクラシック音楽を実践した希少な団体の一つであった。

学校という場合は、かつて社会のいわば「前衛」だったのであり、それは、近代教育が日本の伝統社会との関係でもっていた「特権性」の故でもあったであろう。先に言及した「地域のなかの学校」という論点が、この「前衛としての学校」という論点との間に取り持つ緊張関係こそ、近代学校史の特徴の一つがあるであろう。

最後は、近年における「学校資料」、「学校博物館」再評価の動きの意味である。未来永劫そのままであるかのように見えた学校は、近年、統合、廃止、移転などの荒波のなかにあるが、これは、学校を支えた地域社会の解体、変容とも軌を一にする現象である。したがって、「学校」や「学校資料」の利活用を論じるとき、そこにはもはや「自明の当事者」は「いない」ことを前提とすべきであり、「新たな観点」からの「よそ者」による「価値付け」が不可欠である。逆に、時代の変容を越えて存続してきた「学校博物館」には、そのような多様な力のせめぎ合いが刻印されているはずで、それ自体、日本近代の見直しの重要な材料となろう。

他方、村野氏が最後に指摘した、日本の博物館学、博物館史のなかでの「学校博物館」の位置づけは、博物館という概念自体が、学界および社会において、どのようにとらえられてきたのかをめぐる重要な問題提起であり、現象を観察する科学(学問)それ自体の脱構築作業としても、「公共性」をめぐる議論の中では欠かせない視点であろう。

大学をはじめとする学校の歴史は、かつて「沿革と事件史」か、あるいは「教師の顕彰」のみであった。九州大学をはじめとする大学の歴史も、依然としていまなおこのレベルにあるが、両氏の報告が示しているように、「公共空間における利活用」問題に取り組むには、まずこのような古い発想から決別する必要がある。新たな論点として、地域社会、人間関係、権力、記憶の力学、社会からの遊離、などの論点が浮上していることは、「学校資料」をめぐる考察が、いまふたたび「前衛」となりつつあることを予感させるものである。